伊良部島方言の動詞屈折形態論

下地, 理則

<https://hdl.handle.net/2324/7342422>

出版情報 : 琉球の方言. 32, pp.69-114, 2008-03-31. 法政大学沖縄文化研究所
バージョン :
権利関係 :

伊良部島方言の動詞屈折形態論*

下 地 理 則

1. はじめに

本稿の目的は、南琉球語伊良部島方言（以下、伊良部島方言）¹の動詞の屈折体系（語形変化の体系）を、主に形式面に着目しながら記述することである。特に本稿が明らかにするのは以下の2点である。

- (1) 伊良部島方言の動詞の内部構造：語幹形成と屈折語尾
- (2) 伊良部島方言における語の定義（自立語、付属語、接語、接辞の区別）

(1) に関して、伊良部島方言の動詞の形態論については、伝統的な国文法の記述法（活用表）を用いて、すでに本永（1982）および名嘉真（1992）が概観を示しているが、これらは方法論上、語幹の変化（未然・連用など）と語形変化（終止・連体など）を同列に扱っており、屈折形態論として必ずしも適切とは言えない（鈴木 1960 も参照）。特に、屈折語尾がどのような形式的・機能的対立を示しているのかという点が明確になっていない。そこで本稿では、活用表によらず、独立した手続きにより伊良部島方言の動詞の語形変化の体系を詳細に記述することを目指す。

(2) は、(1) の前提となる議論であり、動詞の語形変化を含めた形態論全般を記述する上で最も重要な議論である。すなわち、どこからどこまでを語と認定するのか、という、形態論の記述範囲を定めなければ (1) は議論できない。ところが皮肉なことに、語の認定の問題は、形態論の研究が非常にさかんである琉球語の研究史においていまだ曖昧な部分が多いといわざるを得ない。このことは、国文法の活用表による便宜的な記述が中心であることと無関係ではないだろう。すなわち、活用表による記述では、記述範囲が自明であるために、各方言の言語事実に沿った語境界の認定の問題はそもそも生じにくく、後回しにされがちである。本稿では、活用表によらない記述を目指すという (1) の目的に連動し、(2) をあえて問題にする立場を取る。形態論の記述対象である語を伊良部島方言の言語事実に沿って定義することにより、(1) の記述を確かなものとすることを目指す。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節において、伊良部島方言の音韻・文法の概説を行い、3節以下の本論への導入とする。3節では語を定義し、伊良部島方言の形態論

の記述の範囲を定める。4 節では、語としての動詞に焦点を絞り、動詞の屈折形態論を記述する。5 節では動詞の屈折形式の機能の簡単な記述を行い、本稿の焦点である形式的な議論から、今後の研究課題である機能面の議論への導入を行う。6 節で結論を示す。

2. 伊良部島方言の音韻・文法概略

本節では、3 節以下の本論の理解に必要な音韻論および形態統語論の概説を行う。2.1 から 2.2 において音韻論の概略を示し、2.3 から 2.5 において形態統語論の概略を示す。なお、音韻論と形態統語論の詳細については下地 (2006)、Shimoji (2007b) を参照されたい。

2.1. 分節音韻論

2.1.1. 音素目録と表記

伊良部島方言の音素目録および、本稿で採用する表記は以下の通りである。

- (3) a. 母音 (short/long) : i/ii, (e/ee), a/aa, (o/oo), u/uu, i/ii b. 半母音 : (w), j
c. 子音 :

		Labial	Alveolar	Velar (/Glottal)
Stops	vl	p	t	k
	vd	b	d	g
Fricatives	vl	f	s ts	(h)
	vd		dz	
Resonants	nasal	m/mm	n/nn	
	(short/long) approx	v/vv (/v(:) /)	z/zz (/z(:) /)	
	tap		r/rr	

破擦音は音韻的には *fricative* と同じ機能 (分布上の特徴 ; 音韻規則における振る舞い) を持つので *fricative* のクラスに入れてある。子音において *resonant* のクラスだけは母音のように長短の区別がある。さらに、non-nasal alveolar resonant (z/zz, r/rr) は音節核になる場合があり (pz.tu [pʂtʊ] 「人」 ; br.brr.gas.sa [b|b|:gassa] 「クワズイモ」)、その点でも母音と類似している。よってこれらを *Semi-consonant* とカテゴライズする立場がある (かりまた 2002 ; Shimoji 2006 ; Pellard 2007)。

なお、例文の形態素分析において、屈折カテゴリーがゼロ形式で生じる場合、 $\emptyset$ を用いて表わす ((11) などを参照) が、これは音素表記ではない。

2.1.2. 音節構造とモーラ

語（特に自立語と付属語；3節で詳しく定義）の音節構造は、(4)に示すように3つの部分に分けて記述できる。

(4) (**presyllable** +) **initial syllable** (+ **non-initial syllable**_{1...n})

(4a) presyllable は resonant: (**R**_i) **R**_i e.g. *mm.sa* 「似ている」 (**RR.CV**)

(4b) initial syllable の構造: ((**C**_i) **C**_i) (**G**) **V**₁ (**V**₂) (**C**_{coda}) e.g. *ssam* 「しらみ」 (**CCVC**)

(4c) non-initial syllable の構造: (**C**) (**G**) **V**₁ (**V**₂) (**C**_{coda}) e.g. *juu.rja* 「季節」 (**GVV.CGV**)

(4d) 語中の子音連続は resonant+C か、重子音のみ。e.g. *paz.gi* 「おでき」 (**CVC.CV**)
bat.ta 「わきの下」 (**CVC.CV**)

(4e) 語末には1つの子音が立ちうる。すべて resonant。

pa.sam 「はさみ」 *sa.kon* 「石鹸」 *i.rav* 「伊良部」 *paz* 「ハエ」 *ar* 「アリ」

(4f) 自立語の構造：まとめ

#Presyllable	Initial syllable	Non-initial syllable _{1...n} #
((R _i) R _i)	((C _i) C _i)	(G) V ₁ (V ₂) (C _{coda})
		(C) (G) V ₁ (V ₂) (C _{coda}) ... (C _{coda})

モーラの数え方は以下の通りである。

(5) **a. In a syllable**

C _i	C _i	G	V ₁	V ₂	C _{coda}
μ	—	—	μ	μ	μ

b. In a presyllable

R _i	R _i
μ	μ

(6) 2モーラの語の例

zza 「父」; *n.dza* 「どこ」

3モーラの語の例

av.va 「油」; *nn.ku* 「膿」

4モーラの語の例

ka.na.mar 「頭」

2.1.3. 音韻規則

動詞の屈折のパターンを記述するために、以下の音韻規則を導入しておく必要がある。これらは、特定の形態構造に適用される形態音韻規則ではなく、あくまで一般的な音韻規則であり、単純語にも適用される (Shimoji 2007b)。なお、本稿では、基底の音素レベル（形態素・形態音素レベル）と表層の音素レベル（異形態・音素レベル）を区別する必要がある場合には前者を // // で、後者を / / で標示するものとする。

2.1.3.1. 重子音化規則

この規則は、例えば以下の (7) に例示されるように、基底レベルでモーラ子音のあとに (半) 母音が生じるような場合 (//C//+ //(G)V//)、義務的にモーラ子音と同一の子音

が挿入されて表層で /C_iC_i(G)V/ を生じるという規則である。すなわち、伊良部島方言において、モーラ子音のあとに /(G)V/ が直接後続するという音節構造は許されない。

(7) //par// 「針」 + //a// (主題) > /parra/ 「針は」 (/CVCCV/)

2.1.3.2. /i/ 挿入規則

この規則は、fricative のあとに /i/ を挿入する規則である。fricative が語末に生じる場合や、語中で重子音以外の fricative+C の子音連続が生じる場合など、音素配列の点で破格の構造になる場合に挿入される。例えば //tauf// 「豆腐」 や //umats// 「火」 は、このままでは語末に fricative が生じることとなり、音素配列の点で破格である ((4e) 参照)。よって、/i/ 挿入規則により表層で /taufi/ および /umatsi/ となる²。同様に、//tauf// や //umats// に曖昧さを示す接辞 //nagi// 「など」 が後接すると、*/fn/ や */tsn/ という破格の子音連続 ((4e) 参照) を生じるため、/i/ 挿入規則により /taufinagi/ 「豆腐など」 および /umatsinagi/ 「火など」 となる。なお、基底が //tauf// や //umats// であることは、以下のテストにより確かめられる。すなわち、これらに主題の接語 //a// が後接すると、2.1.3.1 で見た重子音化規則により /tauf-fa/ および /umats-tsa/ となり、(7) の //par// 「針」 同様、基底が子音で終わっていることが分かる。

2.2. 韻律

2.2.1. 語のアクセント

伊良部島方言のアクセントはピッチアクセントであり、弁別性を持たず、モーラ数と音節構造によりほとんど予測が可能である。アクセントは以下の (8) のようにまとめられる。

(8) アクセント規則

モーラ数 :	2	3	4 +	
アクセント核 :	1 or 2	2 or 3	2	
例 :	(8a)	(8b)	(8c-d)	
	(8a) 2 モーラ	(8b) 3 モーラ	(8c) 4 モーラ	(8d) 5 モーラ
	na(*)da(*)	tunu(*)ka(*)	kana*mar	ugu*naar
	HH* or H*L	HHH* or HH*L	HH*LL	HH*LLL
	「涙」	「卵」	「頭」	「集まる」

なお、語頭の H は、特に 3 モーラ以上の語において、また特に 1 モーラ目が (G)V の場

合において、句頭でLになることがある（例えば (8d) は LHLL となる場合がある）。伊良部島方言においては、音節内部におけるLからHへの上昇は禁止されており、重音節の2モーラ目でLからHへ上昇することはない（Shimoji 2006）。したがって、語頭が重音節の場合、例えば *kaagi* 「匂い」は HHH か HHL であり、LHH や LHL は生じない。

こうした語頭におけるピッチの上昇 (L→H) は、アクセントの特徴というよりも、シタックスの情報がかぶさった句レベルの規則として捉えるべきであろう。本稿では、語のレベルにおいてはアクセント核より前のモーラはHのトーンを持っていると考える。

(8) の規則を簡略化したものが以下の (9) である。これは、次節に見る音韻句の韻律規則を説明するうえで有意義である。

(9) 簡略版のアクセント規則 (W: 語 ; M: 語中アクセント ; F: 語末アクセント)

No of moras:	W _{2,3}	W ₄₊
Position:	M or F	M
Example:	(8a-b) 参照	(8c-d) 参照

2.2.2. 音韻句

伊良部島方言の韻律の大きな特徴は、語よりも大きな単位（音韻句）で規則的なパターンを見せることである。この韻律パターンを支えているのはフットを基調にしたリズム構造である。なお、ここではフットを、便宜的に、アクセントを持つ単位と持たない単位で構成される2項の単位とし、モーラや音節によるフットの定義（Nespor and Vogel 1986; Poser 1990）とは異なっている点に注意されたい（(11) 以降、例文の略号一覧は6節のあとに記載）。

(10) 音韻句（複数の語）のアクセント規則（抜粋：完全な規則は Shimoji (2007b)）

- a. 隣接する語がフットをなし、奇数番号にアクセント (W₁ W₂) (W₃ W₄)
 b. アクセントを持つ語のアクセント位置 : W_{2,3}: F accent; W₄₊: M accent

(11) <i>idi-i</i> *	<i>ts-tsi-i</i>	<i>par-i-i</i> *	<i>njaan-∅</i>
出る -CVB.SEQ	来る -CVB.SEQ	去る -STM -CVB.SEQ	PERF -NPST.SUB
<u>W1</u>	W2	<u>W3</u>	W4

「出て来て行ってしまった。」

なお、2モーラ以上の接辞は、(ほとんどの場合) 韻律的に語と同様の扱いを受ける。すなわち、2モーラ以上の接辞は、語と同様、フットの項となり、音韻句の規則に従っ

てアクセントを持ちうる。以下の (12) を上の (11) と対照されたい。

(12) *mii*-simi-rai*-tar*

見る -CAUS -PASS -PAST.SUB

W1 -W2 -W3 -W4

「見させられた」

2.3. 基本的な統語構造

基本的な統語構造のほとんどは、ジャポニックの言語（琉球語・日本語）の典型的な特徴を反映している。例えば、最も自然な統語構造は、動詞が文末に生じるという *verb-final* の構造であり、句は修飾部 - 主要部の語順からなる。格組織は主格対格型に準じ、主語標示は自他ともに同一（主格）で、目的語の格（対格）と区別される。対格には =*u* と =*a*（対格 2）の 2 種類あり、主に他動性の違いによっているが、対格 2 はその出現が特定の副詞節に限定される傾向がある（(59a-b) 参照；下地 2007）。格に情報構造のマーキング（主題・焦点）がかぶさることにより、主格が主題標識によって置き換えられる。目的語については、現代日本共通語と異なり、専用の主題標識 *baa* ないしその接語形式 =*ba*（接語については 3.1 参照）があり、対格に後接する。いわゆる係り結びが存在し、(13b') のように焦点が出現した場合、述語動詞は直説法 (4.1.2; 5.1.1) であってはならない (cf. (13b) ; 5.1.4 も参照)。

(13a) *banti =ga ffa-mmi =nu uma =n u-tam.*
 1PL =GEN 子供 -PL =NOM そこ =DAT いる -PAST.IND
 「私達の子供たちがそこにいた。」

(13b) *banti =ga ffa-mmi =nu zzu =u tsii-tam.*
 1PL =GEN 子供 -PL =NOM 魚 =ACC 釣る -PAST.IND
 「私達の子供たちが魚を釣った。」

(13b') *banti =ga ffa-mmi =a jurru =u =du tsii-tar.*
 1PL =GEN 子供 -PL =TOP 魚 =ACC =FOC 釣る -PAST.SUB
 「私達の子供たちは *jurru*（魚の名前）を釣った。」

(13c) *tsii-tar zzu =u baa nau =si =ga fau-tar?*
 釣る -PAST.SUB 魚 =ACC TOP 何 =INST =FOC 食べる -PAST.SUB
 「釣った魚はどうやって食べた？」

2.4. 形態構造

伊良部島方言の形態論においては、接頭辞がほとんどなく、接辞といえるものはほぼ接尾辞のみである（同様に、接語に関しても、筆者がこれまで確認した限り全て enclitic である）。語幹合成（複合および完全重複；語幹境界を+で標示）も多用し、語の内部構造は理論上相当程度複雑になりうる。以下は、筆者のテキストデータで見られた最も長い語の例の1つであり、7つの形態素が1語に纏められている。

- (14) *puri+munu+mmsa-munu-us-i-utui* =du kari =a.
 錯乱する+人+のような-物 -VLZ -STM -CVB.CRCM =FOC 3SG =TOP
 「気が変な人みたいにしているね、あいつは。」

2.5. 形容詞

伊良部島方言においては、品詞として形容詞を設定する必要はない。形容詞語根は前範疇的 (pre-categorial) であり、名詞語幹化・動詞語幹化・副詞語幹化という派生プロセスを経て、名詞・動詞・副詞として自立する (Shimoji 2007a)。よって本稿で論じる動詞の形態構造・屈折カテゴリーなどは、形容詞語根から派生された動詞形式にも当てはまる。以下、簡単に、形容詞語根の派生法を記述しておく。

伊良部島方言においては、以下に示すように、任意の形容詞語根が、複数の派生法により、主要な3品詞の語幹（名詞語幹、動詞語幹、副詞語幹）に変換される。このうち、特殊な例として、6) に示すように語根のみで間投詞的にも用いられる（なお、間投詞の統語的な定義は、単独で発話となること、および、引用の標識 *tii/=ti* によってのみ別の節に埋め込まれることである）。これらの派生法のうち、本稿に関係するのは4) である。

形態的な派生法	派生した語の統語機能
1) 名詞語幹との複合による名詞語幹化	典型的な名詞（項として）
2) 形式名詞 <i>munu</i> との複合による名詞語幹化	名詞述語的
3) 重複による名詞語幹化	属格名詞的；名詞述語的
4) 動詞化接辞 <i>-kaR</i> による動詞語幹化	典型的な動詞（述語として）
5) 副詞化接辞 <i>-f</i> による副詞化	副詞に準じる
6) 語根のみで間投詞化	間投詞に準じる

以下、形容詞語根 *taka-*「高い」を用いて各派生法を例示する。

- 1) *taka+pztu* 「(背が) 高い人」
- 2) *taka+munu* 「高い (もの)」

- 3) *takaa+taka* 「とても高い」 (*takaa+taka=nu pztu* 「とても (背が) 高い人」)
 4) *taka-ka-m* 「高い」 (定動詞直説法非過去)
taka-ka-tam 「高かった」 (定動詞直説法過去)
taka-ka-tigaa 「高かったら」 (条件副動詞)
 5) *taka-fi* 「高く」
 6) *takaa=ti=nu munu* 「高い! という感じのもの」

4) によって形成された動詞語幹 *taka-kaR* (*R* は語中で消え、語末で *r* となる; 4.2.1) は、上の例のように、様々な動詞の屈折接辞を取り、形態論的に動詞として屈折する。例えば日本語の形容詞が、動詞と異なる接辞類 (「高い」などにおける非過去の *-i* など) によって動詞とは別の品詞と設定できるのと異なり、4) のような形式類は屈折語尾によって形態論的に動詞と区別することが出来ない。

通言語的に見て、形容詞的な意味を持つ語 (property concept words; Dixon 1982) は動詞ないし名詞のいずれか (の下位カテゴリー) として形式化される傾向があるのに対し、宮古諸方言のそれは名詞的にも動詞的にも (そして副詞的・間投詞的にも) なり、その柔軟性は特筆すべきものがある (cf. Wetzler 1996; Switch-adjectival)。とりわけ名詞への派生法に富んでいる。これらの用法のうち、2) の形式は、主節の述語としての用法が典型的であり、4) の用法は従属節の述語としての用法が典型的である。この選択には談話的な要因が大きく関与しており、例えば 4) は談話における前提となっている場合に用いられやすく、それは主節で使われていても成り立つ (以下の (15))。その詳細については Shimoji (2007a) および、平良方言についての Koloskova and Ohori (2006) を参照されたい。

- (15) *kui* *=ga* *=du* *taka-kar-∅* *dooi.*
 これ =TOP =FOC 高い -VLZ -NPST.SUB だよ
 「これ (のほう) が高いんだよ。」 (「どっちが高いの?」に対して)

3. 語

動詞の語形変化を論じる際には、その記述対象が問題となる。すなわち、どこからどこまでを動詞として認定するか、という語境界の問題・語の定義を論じておく必要がある。この問題は、文法記述の進んでいる北琉球語においては服部(1955)および内間(1970)が形式面から、鈴木(1960)が機能面(形式間の機能の上での対立という側面)から綿密な考察を行っており、具体的な記述を参考にすることが出来るが、宮古諸方言では活用表による暫定的な記述が中心であり、狩俣(1999)など一部の優れた例外を除き、語の定義がほとんど議論されてこなかった。しかも、宮古諸方言の語の定義はほかの琉球

語には見られない様々な問題をはらんでおり、北琉球語の記述をそのまま応用することは難しいが、この点を指摘した研究はほとんど存在しない。例えば音韻面（特に韻律）で定義する語（phonological word）と形態統語的に定義する語（grammatical word）が大きく食い違う場合がある（Shimoji 2007b ; 2.2.2 の接辞の振る舞いも参照）。よって、伊良部島方言の語を注意深く定義する必要がある。

以下では、下地（2006）の語境界の基準に補足・修正を行い、伊良部島方言の語を定義する。なお、この定義は筆者の知る限り他の宮古諸方言においても有効である³。

3.1. 語の定義

伊良部島方言の語は、その形態統語的・音韻的な自立性を基準に3種類（自立語・付属語・接語）に分けられる。これら語に対立して、接辞が特徴づけられる。接辞は自立語の内部要素であり、自立語の中で一定の固定した位置を占めることが多い⁴。

(16) 伊良部島方言の語と接辞

	自立語	付属語	接語	接辞
a) 共起制限がない	OK	OK	OK	
b) 音韻的に自立（アクセントの単位となりうる）	OK	OK		(OK)
c) 単独で出現可能	OK			

なお、本稿の例文は、語境界（自立語・付属語・接語の境界）ごとにスペースを入れている。さらに、接語境界は = により、接辞境界は - によって明示している。以下、**a)**-**c)** のそれぞれの基準を概観する。

3.1.1. 基準 a)：共起制限

基準 **a)** は、語（自立語、付属語、接語）と接辞を区別する基準である。語は接辞と異なり、特定の要素に縛られず、（一定の制限を除き）複数の要素と共起しうる。例えば、4節で詳述する動詞接辞類（e.g. 使役、受動、語幹拡張辞、否定、テンス・ムードなど）は動詞語幹にのみ接続するが、焦点標識の =du（接語）は名詞、動詞、副詞、モダリティ標識、談話標識、接続詞など、間投詞をのぞく全ての品詞に接続しうる。

(17) 焦点標識 =du とその接続対象

a. 名詞に接続

<i>kuri</i>	=a	<i>tigami</i>	=du	<i>jar-∅</i> .
これ	=TOP	手紙	=FOC	COP -NPST.SUB

3.1.3. 基準 c) : 単独での出現可能性

基準 c) は、音韻的に自立している語のうち、自立語と付属語を区別する基準である。自立語は単独で出現可能であるが、付属語は必ず別の要素に付随しなければならない。例えば、付属語である談話標識の *dara* 「でしょう」は単独では出現できない。なお、付属語が音韻的に自立している（韻律単位になる）ことは、音韻句（2.2.2）においてアクセントを持つことによって確かめられる。

(20) <i>idi-i*</i>	<i>fii-∅</i>	<i>dara*</i>	<i>ssu</i>
出る -CVB.SEQ	来る -NPST.SUB	でしょう	DSC
<u>W1</u>	W2	<u>W3</u>	W4
「出てくるんでしょうよ。」			

このように、*dara* は単独では出現できないが音韻句においてアクセントを持ちうる。

3.2. 動詞とその後続要素の整理

動詞は基準 a), b), c) を全て満たし、自立語と認められる。動詞の終端はテンス・ムード接辞（屈折接辞）であり、これに後続する拘束形態素類（モダリティ標識類・談話標識類）は動詞の外側にある別の語（付属語ないし接語）である。この判定に役立つのは a) である。すなわち、テンス・ムード接辞などの屈折接辞類は動詞語幹にのみ接続するが、モダリティ標識類や談話標識類は名詞述語や副詞などにも後続可能である。例えばモダリティ標識の *padzi* 「かもしれない：だろう」は動詞に後接するだけでなく、以下に見るように、名詞、格標識など様々な要素に後接しうる。

(21a) 名詞述語に後接

kari =*a* *sinsii* *padzi*.
 3SG =TOP 先生 はず
 「彼（女）は先生だろう。」

(21b) 格標識に後接

kari =*a* *pzsara* *kara* *padzi*.
 3SG =TOP 平良 ABL はず
 「彼（女）は平良から（来たの）だろう。」

よって、モダリティ標識類や談話標識類は接辞ではなく、付属語ないし接語ということ

になる。付属語か接語かの区別は上述のとおり音韻的な基準（韻律単位として働くかどうか）によると考える。

以上の議論から、動詞の語境界を以下のように画定する。なお、以下は文末終止の主節の動詞を想定している。

(22) [[語幹]- 屈折接辞] (# モダリティ標識) (# 談話標識)

ただし # は語境界を表わす。

屈折接辞類は、(22) から、常に動詞の語末に生じることが分かる。よって、屈折接辞類を今後は屈折語尾と呼ぶことにする。動詞に後続するモダリティ標識・談話標識をまとめて助詞と呼ぶことにする⁶。よって、ここまでの記述をまとめると以下のようになる。

(23) 伊良部島方言の動詞：まとめ

	動詞	助詞	動詞接辞
		┌	
		└	
	自立語	付属語	接語
			接辞
a) 共起制限がない	OK	OK	OK
b) 音韻的に自立（アクセントの単位となりうる）	OK	OK	(OK)
c) 単独で出現可能	OK		

屈折語尾および動詞の形態論の詳細は次節で論じる。以下に、助詞の代表的なものを挙げておく。助詞が付属語と接語の両方の異形態を有する場合は、X/=Y という風に標示する。

(24) モダリティ標識

padzi 「はず；かも」

bjaam 「かねえ」

gara 「かなあ」（疑問詞と共起）

=tsa 「だとさ」

(25) 談話標識

dara 「だね；でしょ」

dooi 「だよ」

ii/=i 「ね」

juu/=ju 「よ」

jarru(u)da 「でしょ」

=da 「（-については）どうか？」

なお、本稿における「モダリティ」は意味のレベルでの用語である。行為者の能力や義

務などを表わす Agent-oriented modality、聞き手の行為を促す命令などの Speaker-oriented modality、命題の成立の実現性に関する話者の評価態度を表わす Epistemic modality を総称したものである (cf. Bybee 1985; Bybee and Fleischman 1995)。モダリティは上記の助詞類や副詞など様々な言語形式によって表現される。次節で記述する「ムード」とは、モダリティが動詞の屈折カテゴリーとなって現れたものを指す (Bybee and Fleischman 1995: 2)。ムードは、文末終止の動詞形式において、屈折語尾によって義務的に標示される。

4. 動詞屈折

本節では、3節で確定した動詞を対象に、その屈折形態論を記述する。3節で定義したように、動詞は語幹と屈折語尾からなっている。伊良部島方言の動詞の構造は、以下のように整理すると分かりやすい。動詞の屈折とは、屈折語尾を取り替えることにより動詞がさまざまに変化する語形変化を指す。

(26) 動詞： [第一類 (+ 第二類) (+ 語幹拡張辞) (+ 第三類)]_{語幹} + 屈折語尾

以下、動詞の構成要素のそれぞれを記述していく。まず 4.1 では 4 節の全体の議論を支配する屈折という概念を定義し、屈折語尾の相違に基づく動詞の主要な下位クラスを導入する。4.2 において語幹の構造を記述する。4.3 では、語幹の別による異形態なども考慮した屈折語尾の詳細なリストを示す。屈折形式の機能については 5 節を参照されたい。

4.1. 屈折に基づく動詞形式の分類

4.1.1. 屈折の定義

本稿では、屈折の基準として、Matthews(1974), Bybee(1985), Anderson(1985), Bickel and Nichols(2007) らに共通して見られる基準として (27a) を挙げ、これによって伊良部島方言の屈折カテゴリーとして (27b) を指定する。

(27) 伊良部島方言の屈折

- a. 定義：語が置かれる統語的な環境に応じて義務的に生じる（または抑制される）カテゴリーを屈折カテゴリーと呼ぶ。
- b. 屈折カテゴリー：テンス・ムード・副詞節標示

動詞は、以下の例（動詞語根 *kar* 「借りる」とその屈折）に見るように、主節・関係節・

主要部なし関係節（補文）の述語動詞として機能する場合はテンスとムードの標示が必須であるが、副詞節の述語動詞として現れる場合はテンス・ムードの標示が抑制され、かわりに副詞節の種類を示す要素が義務的に生じる。これらの屈折カテゴリーが、形式的には屈折語尾となって、形態論的に動詞を閉じる位置に現れる。

(28) 主節：テンス（過去 vs. 非過去）・ムード（直説法 vs. 接続法 vs. 希求・推量法）

a. *dzin =nu baa kar-tam.*
 金 =ACC TOP 借りる -PAST.IND
 「お金は（確かに）借りた。」（過去、直説法）

b. *dzin =nu baa kar-tar.*
 金 =ACC TOP 借りる -PAST.SUB
 「お金は借りた。」（過去、接続法）

c. *dzin =nu baa kar-a-djaan.*
 金 =ACC TOP 借りる -STM -NEG.INT
 「お金は借りないでおこう。」（非過去、希求・推量法（否定意志））

(29) 関係節：テンス（過去 / 非過去）・ムード（接続法）

dzin =nu kar-tar pztu
 金 =ACC 借りる -PAST.SUB 人
 「お金を借りた人」（過去、接続法）

(30) 主要部なし関係節（補文）：テンス（過去 / 非過去）・ムード（接続法）

dzin =nu kar-tar =ra taru =ga?
 金 =ACC 借りる -PAST.SUB =TOP 誰 =Q
 「お金を借りた（人）は誰だ？」（過去・接続法）

(31) 副詞節：副詞節標示

a. 条件副動詞

kai kara dzin =nu kar-tigaa mmja uwari!
 3SG ABL 金 =ACC 借りる -CVB.CND DSC 終わり
 「彼（女）からお金を借りたら、もう、おしまいだ！」

じる。副動詞は副詞節にのみ生じ、その屈折カテゴリーは副詞節標示のみである。副詞節を支配する上位の節（e.g. 主節）に対する意味的な関係によって様々な語尾を取る。

4.2. 語幹の構造

(26) に示したように、語幹は第一類、第二類、語幹拡張辞、第三類からなる。

4.2.1. 第一類

第一類は (33a) のように単に動詞語根の場合もあるが、複合語幹 (33b)、または名詞や形容詞語根などから派生された動詞語幹 (33c) の場合もある。

(33a) <i>mii-tam</i>	(33b) <i>mii+padzimi-tigaa</i>	(33c) <i>ssu-ka-tigaa</i>
miiR -tam	miiR+padzimiR -tigaa	ssu -kaR -tigaa
見る -PAST.IND	見る + 始める -CVB.CND	白 -VLZ -CVB.CND
「見た」	「見始めたら」	「白かったら」

上の例に見られるように、動詞語根や接辞の一部には形態音素 //R// で終わるものがある。形態音素 //R// は、語末で /r/ として出現し、語中では消去されるものとする。よって、語根 //miiR// 「見る」はそのまま出現すれば *miir* になり、定動詞の屈折語尾 *-tam* が後続すれば *mii-tam* 「見た」となる。語中であるのに *r* が出現するなど //R// の出現には例外もあるが、それらのほとんどは、語境界が曖昧な場合（後続形態素が接語か接辞か微妙な場合など）であり、逆に //R// の一般的性質に矛盾しない振る舞いであると言える。例えば、語根 //miiR// に直説法非過去の屈折接辞 *-m* が後続すると、*miir-m* となり、//R// は *miir* と *-m* の間に語境界があるように振舞うが、形容詞語根を動詞化する接辞 *-kaR* に接続すると、*ssu-kaR -m > ssu-ka-m* 「白い」などとなり、//R// は語中の実現形となる。歴史的に、この *-m* の再構には諸説あるが、動詞に後続する推量の接語 */mu/ であったという説がある（内間 1984）。しかし *-m* は動詞語幹にのみ接続する⁷。この点で接語とは異なっている。

形態音素 //R// を持つ形式類は以下の通りである：

(34a) 語根：miiR 「見る」、ntsiR 「置く」、idiR 「出る」など。多くは日本語における母音語幹動詞の語根に対応する語根である。

(34b) 接辞類：-simiR（使役）、-(r)aiR（受動）、-kaR（動詞語幹化）

なお、表層で /r/ で終わっている語根すべてが形態音素 //R// で終わっているわけではない。例えば動詞語根 *tur* 「取る」は定動詞直説法過去の屈折語尾をつけると *tur-tam* 「取

った」であり、*r* が語中で消えないことから、これが形態音素の **R** ではないことが分かる。こうした、//**R**// の実現形でない /*r*/ を持つ語根の多くは、やはり日本語の、子音語幹動詞の *r* で終わる語根に対応することが多い。例えば *pur* 「掘る」、*mur* 「盛る」、*bar* 「割る」などである。

miiR + *-tam* > *mii-tam* 「見た」

tur + *-tam* > *tur-tam* 「取った」

今後、//**R**// で終わる語根 ((**33a**) の *miiR*) や派生語幹 ((**33b**) の *mii+padzimiR* や (**33c**) の *ssu-kaR*) を **R** 語幹、そうでない語幹を非 **R** 語幹と呼ぶことにする。これは、屈折語尾の取り方を決定する最も重要な区分である。

4.2.2. 第二類

第二類はボイス接辞類 (使役・受動) からなる。2つの接辞が共起する場合、使役・受動の順序となる。受動接辞は可能の意味を表わす接辞と同形である。これらが同一の形態素か、同音異義の別形態素かは現時点では分かっていない (下地 2006 も参照)。ここでは受動接辞という用語で受動・可能をも指すことにする。

使役接辞には2種類あり、原則として **R** 語幹には *-simiR* が、非 **R** 語幹には *-as* が後続する。すなわち、使役接辞の接続によって語幹のタイプ (**R** 語幹か否か) が変わることはない。次節で述べるように、非 **R** 語幹は特定の屈折語尾 (例えば以下の例における副動詞語尾 *-utui*) を取る際に語幹拡張辞 (グロスでは **STM**) を必要とするが、**R** 語幹は必要としない。この相違が以下の例に現れている点に注目されたい。

(35) 使役接辞 : *-simiR* および *-as*

a. *ntsi-simi-utui*

置く_R -**CAUS**_R -**CVB**.**CRCM**

「置かせていて」

b. *kak-as-i-utui*

書く -**CAUS** -**STM** -**CVB**.**CRCM**

「書かせていて」

一方、受動接辞は、接続する対象が **R** 語幹か否かによらず *-(r)aiR* (接辞の最初の (*r*) は **R** 語根に後続する場合のみ出現) が後続し、全体を **R** 語幹化する。すなわち、非 **R** 語幹に接続した場合、語幹のタイプを変える。以下の (**36b**) において、非 **R** 語幹 *kak* 「書く」は受動接辞によって **R** 語幹に変換されており、語幹拡張辞を取らない。(**35b**) と比較されたい。

(36) 受動接辞 : -(r)aiR

a. *ntsi-rai-utui*置く_R -PASS_R -CVB.CRCM

「置かれてあって」

b. *kak-ai-utui*書く -PASS_R -CVB.CRCM

「書かれてあって」

4.2.3. 語幹拡張辞

語幹拡張辞は非 R 語幹のみが要求する接辞であり、第三類（否定）および特定の屈折語尾を取る際に生じる。例えば、以下の例が示すように、非 R 語幹の *kak-*「書く」（語根）ないし *kak-as*「書かす」（語根+使役）は否定の接辞を取る場合や、一定の屈折語尾類取る際に語幹拡張辞 *-a* を要求し、別の屈折語尾類を取る際には別の語幹拡張辞 *-i* を要求する。語幹拡張辞を要求しない語尾類もある。

(37) 語幹拡張辞と後続要素（抜粋）

第二類まで	語幹拡張辞	第三類	屈折語尾	意味
<i>kak(-as)</i>	<i>-a</i>	<i>-n</i>	<i>-∅</i> (接続法非過去)	「書かない」「書かせない」
	<i>-a</i>		<i>-baa</i> (希求・推量法願望)	「書きたい」「書かせたい」
	<i>-a</i>		<i>-ba</i> (条件副動詞)	「書けば」「書かせば」
	<i>-i</i>		<i>-ba</i> (理由副動詞)	「書くので」「書かせるので」

語幹拡張辞の働きは、主に形態素境界（語幹と屈折語尾の境界）における音節構造の調整にあるが、これを単に挿入母音（形態音韻論的現象）と見ることは出来ない。まず、上で見たように語幹拡張辞には2種類（*-a*と*-i*）あり、後続する第三類および屈折語尾に応じていずれかが生じる。さらに完全に形態音韻的な変化であれば、周囲の音韻環境によっていずれが出現するか予測可能なはずだが、この2種の分布はそれでは説明できない（例えば上の例で、*-a*と*-i*ともに*kak(as)-*と*-ba*の間に生じうる）。しかも、*-a*が生じるのは常に未然の事態（否定や未実現の事態・希求される事態など）を表わす場合である（下地 2006）。よって、*kak-a-ba*「書いたら（仮定）」と*kak-i-ba*「書くので（確定）」は、語幹拡張辞によってその意味が区別されているのである。このようなことから、本稿では語幹拡張辞という形態素を認め、挿入母音という考え方を取らない。

4.2.4. 第三類

第三類を構成するのは否定接辞である。本稿では否定を派生カテゴリー（語幹の要素）として記述するが、伊良部島方言において否定は屈折カテゴリーとの区別が難しく、以下に見るように、少なくとも3つの点で屈折カテゴリーに類似した特徴を持っている。

記述する立場によっては、本稿と異なり、否定を屈折カテゴリーとして処理することも考えられるだろう。いずれの立場であっても、否定をいずれかのカテゴリーに分類する際に問題が生じる点では変わりがないだろう。

まず、否定以外の全ての派生カテゴリーが形式的には語幹拡張辞より前、すなわち第一類・第二類において生じるのに対し、否定は屈折語尾同様、語幹拡張辞よりも後に生じている（以下の -N）。この形態的な分布の点で、屈折に近い性質を持っていることが分かる。

(38) *ssjana-kar-as-a-t-tar*.

<i>ssjana</i>	-kaR	-as	-a	-N	-tar
汚い	-VLZ	-CAUS	-STM	-NEG	-PAST.SUB
第一類		第二類	語幹拡張辞	第三類	屈折語尾

「汚さなかった」

次に、屈折カテゴリーと否定が融合し、ひとつの屈折語尾で表わされる場合もある。例えば、定動詞希求・推量法（意志）は屈折語尾 *-di* によって表わされ、その否定は別の語尾 *-djaan* によって表わされる。

(39a) *kak-a-di*

書く -STM -INT
「書こう」

(39b) *kak-a-djaan*

書く -STM -NEG.INT
「書かないでおこう」

最後に、屈折の定義 (27a) に直接関わる特徴として、否定は副動詞との結びつきが定動詞に比べて弱く、一部の副動詞しか否定接辞を取れない点が注目される。この点で、否定は定動詞という統語環境にある程度縛られている傾向が見て取れる。つまり、テンズ・ムードのように、否定は副動詞において抑制されるカテゴリーであると見ることが出来そうだ。第三類を含む副動詞は以下の 2 形式のみである。ただし、否定条件副動詞については、*-kaa* が単独では用いられず、常に *-da-kaa* の形式で現れるので、これを共時的に屈折語尾 *-dakaa* とすることも考えられる。その場合、上述したような否定と屈折語尾との融合がここでも見られるということになる。

(40a) 絶対否定副動詞「一せずに」

<i>dzin</i>	=nu	<i>tur-a-da-∅</i>	<i>par-tar</i>	=tsa.
金	=ACC	取る -STM -NEG -CVB.ABS	去る -PAST.SUB	=HS

「お金を取らずに帰ったそうだ。」

(40b) 否定条件副動詞「しなかったら」

vva =ga kuu-da-kaa umisi-f =fa njaan-Ø.
 2SG =NOM 来る -NEG -CVB.CND.NEG 面白い -ADV =TOP NEG -NPST.SUB
 「あんたが来なかったら面白くない。」

以上3つの点から否定を屈折カテゴリーに分類することも可能であり、特に最後に述べた副動詞との結びつきの弱さは屈折の定義に関わる重要な点である。しかし本稿では、副動詞が少数ながらも否定できる点を重視し、屈折の定義(27a)に照らして、否定カテゴリーを動詞の統語環境によらず定動詞・副動詞いずれにも生じるカテゴリー、すなわち派生と考え、形式的には主に第三類を占めると記述とする。このように、否定は形式的な点で屈折語尾と同様の特徴(語幹拡張辞の後という分布上の特徴)を持ち、機能的にも、統語環境にある程度縛られているため、扱いが難しい派生カテゴリーである⁸。

第三類を構成する否定接辞には2種類ある。まず、-N(形態音素//N/)は語中でtが後続する場合にtとして出現し、それ以外では/h/として出現する。一方、-daは副動詞の否定にのみ用いられ、絶対否定副動詞と否定条件副動詞の語尾とだけ結びつく。この2つ以外の副動詞を否定する場合には、いったん定動詞に変換してから第三類の-Nや否定と融合した屈折語尾で否定するという方法が取られる。例えば、理由副動詞 *ik-i-ba*「行くので」を否定し、「行かないので」を表わすには、以下の(41a)のように定動詞接続法で屈折し、第三類の-Nによって否定するか、または(41b)のように定動詞希求・推量法(否定意志)として屈折したのち、理由の接続助詞(助詞の定義は3節参照) *ssiba*「ので」を後続させる方法を取る。

(41a) *maadaa ik-a-n-Ø* *ssiba maadaa s-sa-n-Ø*.
 あまり 行く -STM -NEG -NPST.SUB ので あまり 知る -STM -NEG -NPST.SUB
 「(ふだん) あまり行かないので、あまり分からない。」

(41b) *ba =a ik-a-djaan* *ssiba jaa =n =du ur-kutu*.
 1SG =TOP 行く -STM -NEG.INT ので 家 =DAT =FOC いる -OBL
 「私は行かないので、(明日は) 家にはいるはずだ。」

4.3. 屈折語尾

本節では、屈折語尾の形式に着目し記述を行う。以下4.3.1でまず定動詞の屈折語尾類を記述する。4.3.2では副動詞の屈折語尾類を記述する。以下では典型的なR語幹(idiR-

「出る」) と非 R 語幹 (tur-「取る」) を例に使うが、それ以外のいくつかの動詞屈折のパターンや不規則動詞については、本稿末尾の資料を参照されたい。

なお、すでに 4.2.3 で述べたように、非 R 語幹には語尾 (および第三類) に応じて語幹拡張辞を取る語幹の形と、語幹拡張辞を取らない語幹の形の 2 種類があるので、今後、前者を拡張語幹、後者を基本語幹と呼ぶことにする。

拡張語幹 : *tur-a-di* 「取ろう」 (定動詞希求・推量法 意志)

基本語幹 : *tur-tam* 「取った」 (定動詞直説法過去)

tur-tigaa 「取ったら」 (条件副動詞)、etc.

基本語幹は音韻的には自立語に相当し、基本語幹末の音素配列は語末のそれ (2.1.2 の (4e)) に準ずる (Shimoji 2007b)。基本語幹に後続する語尾は、通時的にはかつて自立語であったものや付属語であったもの、接語であったものなどが含まれる。すなわち、基本語幹と屈折語尾の間には、かつては語境界があったと思われる場合がある (4.3.3)。

4.3.1. 定動詞の屈折語尾

定動詞の屈折語尾は、以下の (42) に示されるように、直説法、接続法、希求・推量法の 3 つの語尾類からなる。直説法と接続法の語尾は過去・非過去の両形式を持つが、希求・推量法は非過去の形式のみを持つ。希求・推量法の命令のみ、R 語幹と非 R 語幹とで語尾が異なる。否定語幹に関して、直説法非過去の形式にギャップがある。これについては 4.3.3 で論じる。非 R 語幹の屈折パラダイムにおいて、基本語幹 **B**(asic) と拡張語幹 **E**(xtended) の別を標示してある。

(42) 定動詞の屈折（屈折語尾をイタリックで標示）

	idiR- 出る	tur- 取る
		基本語幹 (B) tur
		拡張語幹 (E) tur-a/tur-i
定動詞（肯定語幹に接続）		
直説法過去「(確かに) ーした」	idi- <i>tam</i>	B tur- <i>tam</i>
直説法非過去「(確かに) ーする」	idir- <i>m</i>	B tur- <i>m</i>
接続法過去「ーした」	idi- <i>tar</i>	B tur- <i>tar</i>
接続法非過去「ーする」	idir- $\emptyset$	B tur- $\emptyset$
希求・推量法 禁止「ーするな」	idir- <i>na</i>	B tur- <i>na</i>
希求・推量法 義務「ーすべきだ」	idi(r)- <i>kutu</i>	B tur- <i>kutu</i>
希求・推量法 確定未来「ーするだろう」	idi(r)- <i>gumata</i>	B tur- <i>gumata</i>
希求・推量法 意志「ーしよう」	idi- <i>di</i>	E tur-a- <i>di</i>
希求・推量法 否定意志「ーしないでおこう」	idi- <i>djaan</i>	E tur-a- <i>djaan</i>
希求・推量法 願望「ーしたい」	idi- <i>baa</i>	E tur-a- <i>baa</i>
希求・推量法 命令「ーしろ」	idi- <i>ru</i>	E tur-i- $\emptyset$
定動詞（否定語幹に接続）		
直説法過去「(確かに) ーしなかった」	idi-t- <i>tam</i>	E tur-a-t- <i>tam</i>
直説法非過去「(確かに) ーしない」	*	*
接続法過去「ーしなかった」	idi-t- <i>tar</i>	E tur-a-t- <i>tar</i>
接続法非過去「ーしない」	idi-n- $\emptyset$	E tur-a-n- $\emptyset$

4.3.2. 副動詞の屈折語尾

副動詞の屈折語尾は以下の (43) のようにまとめられる。上述のように、否定語幹（すなわち第三類を含む語幹）を用いる副動詞は非常に少ない。否定語幹は第三類の *-da* を用い、非 R 語幹の場合、定動詞と同様に *-a* 拡張語幹を要求する。非 R 語幹では、理由副動詞と条件副動詞の語尾が同形であり（ともに *-ba*）、語幹拡張辞によって区別されるが (4.2.3)、R 語幹では語幹拡張辞を取らないため、語尾の形の変異形 (*-(ri)ba* と *-(ra)ba*) で区別する。ただし、*-raba* はほとんど使われないようだ (R 語幹の *miiR*-「見る」において確認された)。

(43) 副動詞の屈折（屈折語尾をイタリックで標示）

	idiR- 出る		tur- 取る
			基本語幹 (B) tur
			拡張語幹 (E) tur-a/tur-i
副動詞（肯定語幹に接続）			
同時「一しながら」	idi(r)-tstsjaaki	B	tur-tstsjaaki
即時「一するとすぐに」	idi(r)-tuu	B	tur-tuu
条件「一したら」	idi(r)-tigaa	B	tur-tigaa
絶対「一し」（列挙など）	idi-∅	E	tur-i-∅
継起「一して」	idi-i	E	tur-i-i
付帯「一していて」	idi-utui	E	tur-i-utui
理由「一するので」	idi-(ri)ba	E	tur-i-ba
条件「一したら」	idi-(ra)ba	E	tur-a-ba
副動詞（否定語幹に接続）			
絶対否定「一せず」	idi-da-∅	E	tur-a-da-∅
否定条件「一しなかったら」	idi-da-kaa	E	tur-a-da-kaa

4.3.3. 屈折語尾のまとめ

ここでは、これまで見た屈折語尾の取り方において特に注意を要する以下の3点について若干の説明を加えておく。

- 1) 否定における不規則性：特定の屈折において、肯定語幹（第三類なし）を取るが、屈折語尾によって否定する場合（屈折語尾と否定が融合している場合）や、否定形式を欠く場合などがある。
- 2) 語幹との結びつきが弱い語尾類：特定の語尾の場合、語幹末の //R// が語末の実現形 /r/ となることがある。
- 3) 非 R 語幹の拡張語幹・基本語幹の区別と R 語幹との関連：非 R 語幹において拡張語幹に接続する語尾類と基本語幹に接続する語尾類の区別は、R 語幹における 2) と関連している。

4.3.3.1. 否定における不規則性

希求・推量法（意志）は語尾 *-di* が *-djaan* に交替することによって否定される。しかし形式的には肯定語幹と語尾である。希求・推量法（禁止）の *-na* も同様に、肯定語幹に後続しているが語尾によって否定の意味が表わされる。こうした屈折語尾による否定は、

実際はその否定のスコープが命題に対してであって、ムードを含めた動詞全体の否定ではない (cf. 英語の *must* と *mustn't* などと同様である ; Palmer 1995)。逆に言えば、ムードは否定された命題を含めた広いスコープを持っている。

定動詞直説法非過去は否定語幹と結びつかない。否定と融合した語尾もない。すなわち、この形式は完全に否定を欠く。意味の点で言えば、直説法非過去というテンス・ムードは、否定された命題をそのスコープに入れることが出来ない。このように、直説法非過去と否定が結びつかないのは、以下のように説明できるだろう。すなわち、直説法は、5節で述べるように話者が実際に体験したこと (直説法過去)、または眼前で今まさに起こりつつある事態 (直説法非過去) などに対する話者の確信がある場合にのみ用いることが出来る。日本語の「確実に」などの副詞によって表わされるモダリティが、動詞の屈折語尾になっていると考えてよい。よって、直説法過去における否定形は、ある事態が「起こらなかった」ことに証拠と確信がある場合に用いられる (以下の (44a) 参照)。直説法非過去に否定があるとすれば、それはある事態や状態が「起こらない」ということを話者が確信している場合に限られることになるだろう。しかし、ある事態がこれから「起こらない」ことは、「起こらなかった」ことを確認できる過去の事態に比べて、直接体験や証拠に基づく確信と結びつきにくいだろう。この説明はなお検討を要するが、少なくとも形式上のギャップをうまく説明でき、一考の余地はあると思われる。よって、本稿では、直説法非過去と否定が共起しないことは、直説法というムードの性質によるものであると考える。なお、非過去の否定は、(44b) のように接続法非過去・否定の形式を用いるか、(44c) のように希求・推量法の否定意志などを用いる。

(44a) *ba =a mii-t-tam.*
 1SG =TOP 見る -NEG -PAST.IND
 「私は (確実に) 見なかった」 (否定語幹 + 直説法過去)

(44b) *ba =a mii-n-∅.*
 1SG =TOP 見る -NEG -NPST.SUB
 「私は見ない。」 (否定語幹 + 接続法非過去)

(44c) *ba =a mii-djaan.*
 1SG =TOP 見る -NEG.INT
 「私は見ない。」 (肯定語幹 + 希求・推量法否定意志)

希求・推量法義務および確定未来は、否定語幹を用いた形式が存在するが、これは先に見た希求・推量法否定意志や禁止と同様、ムードを含めた動詞全体を否定しているの

ではなく、命題の否定になっている。例えば、*idi(r)-kutu* 「出るはずだ」の、第三類を用いた否定形式 *idi-n-kutu* は、「出ないはずだ」であり、ムードを含めた動詞全体の否定ではない。これらの形式における動詞全体の否定をするためには名詞の否定と同様に、コピュラを用いなければならない。すなわち、これらの形式は統語的には名詞述語のように働いている。

(45a) *idi(r)-kutu*

出る -OBL

「出るはず (べき) だ」

(45b) *idi(r)-kutu*

ar-a-n-∅

出る -OBL

COP -STM -NEG -NPST.SUB

「出るはず (べき) じゃない」

希求・推量法義務と確定未来は、通時的には接続法と形式名詞の連体修飾構造であったと見られ、したがってその否定が名詞に準ずるのは不思議なことではない。

(46)	<i>idir</i>	<i>kutu</i>	>	<i>idi(r)-kutu</i>
	<i>idir</i>	<i>gumata</i>		<i>idi(r)-gumata</i>
	Verb	Noun		Stem -INFLECTION

kutu は日本語の「こと」に対応し、また *gumata* について、かりまた (2003) の宮古本島保良方言の記述ではこれに相当する形式が「形式名詞」として挙げられている。しかし、本稿でこれらを共時的に動詞の屈折と見なすのは、以下に見る語幹と語尾との結びつきが関係している。

4.3.3.2. 語幹との結びつきが弱い語尾類

本稿では、語幹と語尾の結びつきが弱い根拠として R 語幹における形態音素 //R// (4.2.1) の実現形を用いる。つまり、//R// が語末の実現形 (語幹のみで何も後続しない接続法非過去を基準にすると /r/) となって現れうる場合、その語幹と語尾の結びつきが弱いと考える。

これに該当するのは定動詞については直説法非過去、希求・推量法の禁止、義務と確定未来であり、副動詞について言えば同時、即時、条件の副動詞語尾である。直説法非過去の -m については 4.2.1 および脚注 7 を参照されたい。希求・推量法義務と確定未来は、形態音素 //R// が語末の実現形 (/r/) と語中の実現形 (ゼロ) とで揺れがあることが分かる。これは、上述したように、希求・推量法義務と確定未来がもともと 2 つの語からなる句

であり、文法化によって1語化する途上にあると見られるからであろう。本稿では、R語幹の語中の異形態に接続しうる点、および *-kutu* と *-gumata* が動詞語幹にのみ接続する点 (3.1.1 の基準 a) 参照) から、これらを動詞の内部要素すなわち接辞と見る立場にたつ。希求・推量法禁止については //R// は常に語末の実現形であるが、*-na* が動詞語幹にしか接続しないという点を重視し、これを接辞としている。

副動詞の同時、即時、条件の語尾についても、定動詞希求・推量法の義務や確定未来のように、文法化による一語化の可能性はあるが、通時的な考察については稿を改めた。

4.3.3.3. 非 R 語幹の拡張語幹・基本語幹の区別と R 語幹との関連

非 R 語幹において拡張語幹を要求する語尾類、つまり上の (42-43) において E でマークされている語尾類 (例えば希求・推量法意志の *tur-a-di* 「取ろう」) は、R 語幹において語中の実現形のみを要求し、この点で語幹との結びつきが強いことが分かる (*idi-di* 「出よう」)。一方、非 R 語幹において基本語幹を取る語尾類は、R 語幹において語中の実現形を要求するものもあるが、多くの場合、語末の実現形を許容し、語幹との結びつきは弱いと言える。

すでに述べたように、基本語幹の語幹末の音素配列は自立語のそれに準じ、基本語幹の音韻的な自立性が見て取れるが、非 R 語幹において基本語幹に接続する屈折語尾類の多くが、R 語幹に対しても、形態音素 //R// の語末の実現形を許容し、語幹と語尾の結びつきが弱いことを示している点は重要である。歴史的に見ると、こうした語尾の中には、接続法非過去+形式名詞の連体修飾構造からの文法化がはっきりと見られる場合もあり (4.3.3.2 参照)、直説法非過去の *-m* のように、もとは接語であったと見られる場合もある (この場合も、接続法非過去+接語からの文法化という分析が可能である)。いずれにせよ、これらの語尾の多くは比較的新しく語尾として動詞に編入された可能性が高い。すなわち、動詞に後続していた形式(付属語や接語)が二次的に動詞に編入された形跡が、現在の言語体系において明確に見られると言えるだろう。

5. 動詞屈折の機能

4 節までは動詞屈折の形態論的な側面に焦点を当て、語幹形成および定動詞と副動詞のそれぞれの語尾を記述した。以上で本稿の目的 (1) (2) は達成したものと考える。本節では、これまでに記述した各屈折形式の機能の概観を行うことで、これまでの記述の補遺とする。しかし、動詞形式の機能の記述こそが琉球語の動詞研究における今後の主要な研究課題でもあるため (かりまた 2004:66)、なるべく詳細に記述を行い、問題点や興味深い点を明らかにしておく。まず 5.1 で定動詞の機能を、5.2 で副動詞の機能を記述す

(47b) A: *kuri =a nau mai s-sa-n-Ø dara.*
 3SG =TOP なにも 知る -STM -NEG -NPST.SUB でしょう
 「こいつは何も知らないでしょう。」

B: *gui! kuri =a nau =ju mai s-si+u-m.*
 おい 3SG =TOP なに =ACC も 知る -STM +いる -NPST.IND
 「まさか！この人は何でも知ってるよ！」

(47c) *hai utir-m dooi!*
 はい 落ちる -NPST.IND よ
 「おい、落ちるよ！」（聞き手のすぐそばの花瓶が）

直説法は、1) と 2) の性質から、個人史のテキストや会話において頻出するのに対し、物語テキストでは全くといっていいほど出現しない。物語は、すべて伝聞であり、話者が実際に経験してその成立を確信するということは考えにくい。さらに、物語は完全な独話スタイルで語られるため、2) はそもそも関与しないだろう。物語における主節の動詞は、ほとんどの場合、次に述べる接続法によってマークされる。

5.1.2. 接続法

5.1.2.1. 用法

接続法は、5.1.1 の 1)、2) のいずれか（または両方）を欠く場合に用いられる。しかし、このムードがカバーする意味・談話的な機能は幅広く、分析するのが非常に難しい。

1) に対して、接続法は、話者が命題の成立について証拠や確信を持たずに言明を行う場合（ニュートラルな叙述や伝聞の情報を語る場合）や、命題の成立について確信が低い場合（質問や同意を求める付加疑問など）、いま知った事実への話者の驚き（*mirativity*）などを表わす。こうした点から、伊良部島方言の接続法をひとことでまとめるならば、*irrealis* のモダリティ（Akatsuka 1985）を幅広くマークする形式であると言えそうだ。ここで類型論的な研究成果に目を向けると、Givón (1994) は、通言語的な接続法の機能を考察し、その出現する意味領域が、*irrealis* のモダリティの領域であると結論づけている。今後、伊良部島方言の接続法と *irrealis* モダリティとの関係についてさらなる研究が必要である。

2) に対しては、接続法は上述のように断定や確信の度合いが低い情報を相手に伝え、または聞き手がすでに命題の成立・非成立について知っている場合（前提となっている場合）に用いられやすい。これらの点を考慮すると、この形式によってマークされる事

態は、談話的に見て情報価値が低いといえる。

- (48) ニュートラルな叙述・一般的な真実（ことわざなど）

atu+fini =a *satsi* *nar-Ø.*
後+舟 =TOP 先 なる -NPST.SUB

「後に出た舟が先になる（勝っていても油断するな）」

- (49) 習慣的な事実

sjensoo =nu *tukja* =n =na *nau* =ju *mai* *fau-Ø* =i.
戦争 =GEN とき =DAT =TOP なに =ACC も 食べる -NPST.SUB =TAG

「戦争の時には何でも食べるね。」

- (50) 伝聞（hearsay evidential: 話者の確定した知識ではない）

mjaaku+pztu =u *dzin* =na *tur-a-da-Ø* *par-tar* =tsa.
宮古+人 =TOP 金 =TOP 取る -STM -NEG -ABS 去る -PAST.SUB =HS

「宮古の人はお金は取らずに帰ったとき」（物語の一節）

- (51) 驚き（mirativity: 話者がたった今知った意外な事）

vva =a *nagahama+pitu-us-i+u-tar!*
2SG =TOP 長浜+人 -VLZ -STM+いる -PAST.SUB

「あんたは長浜の人だったんだ！」（予想に反して）

- (52) 前提（動詞が伝える事態は話者も聞き手もすでに知っている）

A: *taru* =nu =ga *az-tar?*
誰 =NOM =FOC 言う -PAST.SUB

「誰が言ったの？」

B: *kai* =ga *du* *az-tar.*
3SG =NOM =FOC 言う -PAST.SUB

「あの人が言った。」

(52) は係り結びの例である。接続法は、係り結びの述語として頻出する。実際、名嘉間(1992)などの先行研究では、接続法は(52)のような係り結びの述語形式として記述されている。しかし、(48)から(51)に見られるように、係り結びでない場合にも接続法は頻出する。

このように、(48)から(52)すべての例における接続法の出現は、係り結びという単

純な原理によっては説明できない。本稿で論じるように、接続法の機能を、直説法との対立において **1)** と **2)** に照らして考える必要がある。係り結びと接続法の関連については 5.1.4 で再度論じる。

5.1.2.2. 接続法と連体形・終止形

接続法は、伝統的な国文法による記述（名嘉真 1992）では連体形と終止形 1 というふうに、その統語環境に応じて 2 つの名称で呼ばれてきた形式を指している。連体形は、本稿では接続法が（主要部なし）関係節に生じる場合を指しており、終止形 1 は、接続法の文末終止用法を指している。なお、終止形 2 は、本稿の直説法にあたる。

名嘉真 1992	本稿
連体形	定動詞接続法（（主要部なし）関係節）
終止形 1	定動詞接続法（文末終止）
終止形 2	定動詞直接法

名嘉真（1992）は、終止形 1 が、終止形 2 に比べて「客観的」であり、終止形 2 はより「主観的」で強意を表わすと記述しているが、それ以上の詳しい分析はなされていない。またこの 2 形式に対応する宮古諸方言やその他の琉球語諸方言の形式類について、それらの機能上の対立は長らく研究者の注目を集めてきた（上村 1963；平山・大島・中本 1967；伊豆山 2002）。これらの研究も、名嘉真同様、終止形 2 に相当する形式が主観的で話者の判断・強調を表わすという点で一致しているが、それ以上の具体的な分析がなく、またムードにおける体系的な対立を捉えているわけではない。本稿における直説法の記述と接続法の記述は、まずこれらを定動詞の屈折形式と位置づけ、5.1 で見た **1)** と **2)** を基準に、これら 2 形式の用法をムードの対立（直説法 vs. 接続法）と捉えようとするものである。話者の確信や断定という特徴が、「主観的」で強意を表わす、という名嘉真らの記述と矛盾しないのは明らかである。一方、接続法が「客観的」かどうかは、名嘉真らの意図する「客観」の定義にもよると思われる。しかし、名嘉真らの記述は、直説法と接続法を対にして、直説法のほうを積極的に定義しようとしており、その点で本稿と同じ立場に立つ。本稿においても、接続法は、まず直説法との対立において定義される形式であり、**1)** と **2)** をともに満たす直説法に対立して、それ以外の幅広い範囲をカバーする、というふうに記述した。すなわち、意味的な点で断定や確信において積極的でなく、談話的に情報価値が低い、というものである。

5.1.2.3. 接続法という用語

ある形式をどう呼ぶかは文法記述において二次的な問題であるが、なるべくその形式の本質を表わし、かつ特定の学派だけでなく多くの言語学者に理解できるものが望ましい。本稿で「連体形」や「終止形1」という用語を避け、定動詞接続法という用語を採用する理由は2つある。

まず、伝統的な用語を避ける理由は以下の通りである。すなわち、同一の形式を統語機能に応じて「連体形」と「終止形1」と2つの独立した形式として呼び分けることはあくまで便宜的な処理であり、この形式の本質的な機能の解明に役立つか疑問である。むしろ、この形式が定動詞として文末終止の働きをする点と従属節の述語にもなるという点が重要なのであり、それをどう記述するかに関心を寄せるべきではないだろうか。

次に、この形式を接続法と呼ぶ積極的な理由は以下のとおりである。接続法という用語は、ヨーロッパの言語における接続法 (subjunctive) との用法の類似から採用したものである。例えばスペイン語の接続法について、Lunn (1995) は以下のような特徴を指摘しており、伊良部島方言の接続法との興味深い類似点が注目される (以下は筆者がまとめたもの)。

- a) 直説法と対立しており、直説法は断定を、接続法は非断定を表わす。
- b) 確信が低くなると接続法を取りやすい。
- c) 情報価値が低い (例えば前提となっている)。
- d) 補文の述語にも、主節の述語にも用いられる。

d) に関して、ヨーロッパの接続法がより従属節の用法中心であるのに対し、伊良部島方言の接続法はむしろ文末終止が中心である。しかし、a)-d) の共通点は、少なくとも同じ用語によって比較する価値が十分あることを示していると思われる。

一般言語学的に見て、伊良部島方言の接続法のような形式、すなわち、主節の述語にもなり、関係節の述語にもなり、補文の述語にもなるような形式は、例えば典型的に非常に似た特徴を持つアルタイ型諸言語 (風間 2003) にも見られ、これを分詞 (形容詞的・副詞的な非定形節) や形動詞 (形容詞的な動詞) という用語で呼ぶ慣習があるが、こうした位置づけは、この形式が非定形節の述語であり、この形式の文末終止の用法が二次的あるいは限定的であるというバイアスがつきまとい、必ずしも適切とは言えないだろう。特に伊良部島方言の場合、この形式は明らかに直説法や希求・推量法と範例的に対立し、定動詞の屈折体系に組み込む必要がある。意味的にも、ここまで述べたように、直説法とムードで対立していると見る十分な証拠がある。よって、少なくとも伊良部島方言の記述においては、この形式を、定形節の述語となる定動詞の屈折形式として考え

るべきである（この点では伝統的な国文法による「終止形1」という分析は妥当であったと言える）。この前提に立った上で、この形式が従属節に生じる場合をどう考えるか、を議論すべきであろう。通言語的に見て、定動詞でありながら従属節にも生じ、かつ意味・機能の点で伊良部島方言の当該形式に類似している形式に準じた名称をつけるほうが好ましい。「接続法」という名称はこの点で適切であり、また一般言語学的にも広く知られている用語であるため、本稿で採用するものである。

5.1.3. 希求・推量法

このムードは、話者の確信を積極的に標示しない点で接続法と同様である。ただ、このムードは、接続法よりも明確な意味を持つといえるだろう。すなわち、このムードは、いまだ生じていない事態を推測するか、その実現を希求する意味を明確に表わす。

(53) 意志（または勧誘）

dzuga ba =ga tur-a-di.
 さあ 1SG =NOM 取る -STM -INT
 「さあ、私が取ろう。」

(54) 願望

ba =a uri =u =ba fa-a-baa =ti =ja
 1SG =TOP 3SG =ACC =TOP 食べる -STM -OPT =QT =TOP
 「私はそれを食べたいなあとは（思わない）。」

(55) 義務（または未来）

kuri =u =ba vva =ga asi-kutu jarruda.
 3SG =ACC1 =TOP 2SG =NOM する -OBL だろう
 「これは君がすべきだろう。」

(56) 確定未来

kari =a nnama kara fi-gumata jaiba mats-i+ur-i-∅
 3SG =TOP 今 ABL 来る -FUT なので 待つ -STM+ いる -STM -IMP
 「彼が今から来ることになってるので、待ってて。」

5.1.4. 係り結びと定動詞のムード

ここまで述べてきたように、直説法は話者の確信を明確に示し、接続法と希求・推量法は話者の確信について積極的な標示機能を持たない。談話機能において、直説法は聞

き手にとって情報価値が高く、したがって聞き手にとって前提ではなく常に新しい情報となる。一方、接続法と希求・推量法にそのような制限はなく、聞き手にとって前提であってもよい。したがって、係り結び構文（以下の(59)）の結びの述語になれるのは接続法と希求・推量法のみであり、直説法は係り結びと共起しない。係り結びは、談話機能の点でいえば、文中の述語以外のある部分に焦点があり、述語は聞き手にとって前提となっている。よって、直説法が結びの形として出現できないという形式的な制限は、直説法のモードと談話機能によって、機能面からも説明が出来る。

(57) A: *nau =ju =ga fau-tar/*-tam?*
 何 =ACC =FOC 食べる -PAST.SUB/*-PAST.IND
 「何を食べたの？」

B: *mudzi =nu zz =zu =du fau-tar/*-tam.*
 麦 =GEN おにぎり =ACC =FOC 食べる -PAST.SUB/*-PAST.IND
 「麦飯のおにぎりを食べた。」

琉球語の先行研究において係り結びの形式的側面（何が結びの形になるか）は盛んに研究されてきたが、なぜ、ある形式だけが結びの形になるのか（あるいはならないのか）について、モードの観点から機能的に説明しようとした試みは管見のところ存在しないようである。5.1.2 で見たように、直説法と接続法の対立には一定の関心が向けられていたが、係り結びとの関連において説明がなされたことはなかった。本稿では、伊良部島方言におけるモードと係り結びの関連について、直説法だけが係り結びの結びの形にないという統語的な制限は、5.1 で指摘したこの形式のモードに関係があると主張したい。この仮説の検証は、今後の主要な研究課題である。

5.2. 副動詞の機能

副動詞は、以下の条件副動詞のように、副詞節を形成して主節に対して副詞的に働くものもあるが、継起副動詞のように、付帯状況など副詞修飾的なものから、事態の継起的な展開を表す *clause chaining* の用法までをもカバーする多機能な副動詞もある。

(58) *pztu =u kurusi-tigaa mmja uwari jarruda.*
 人 =ACC 殺す -CVB.CND DSC 終わり だろう
 「人を殺したら、もう、おしまいだろう。」(条件副動詞)

(59a) *asi =a kak-i-i =du uma =n bi-zi+ur-Ø.*
 汗 =ACC2 かく -STM -CVB.SEQ =FOC そこ =DAT 座る -STM +いる -NPST.SUB

「汗をかいて、そこに座っている。」(継起副動詞：付帯状況)

(59b) *ikken mai niken mai dzin =nu a-tigaa*
 1つ も 2つ も 金 =NOM ある -CVB.CND
waa =nu nakagusi mai ka-i+ts-tsi-i
 豚 =GEN わた も 買う -STM + 来る -STM -CVB.SEQ
nii+fii-i uri =a ski-i
 煮る + やる -CVB.SEQ それ =ACC2 供える -CVB.SEQ

「1つでも2つでも、お金があったら豚の内臓も買ってきて煮てやって、それを供えて…」(継起副動詞：clause chaining)

伊良部島方言の副動詞においては、意味・機能の問題よりも、統語構造の問題が難しく、ひとまず今後の主要な研究課題となるだろう。よってここでは、各形式の用法の列挙ではなく、副動詞の統語構造について問題提起をしておく。

特に問題となるのは継起副動詞の節の分析である。この副動詞は、*clause chaining* の用法や、より副詞修飾的な、付帯状況を表わす用法もある。ひとつの形式が意味の上では等位接続的になったり (*clause chaining* の場合)、より従属節的になったり (付帯状況標示の場合) するということであり、これはアジア型の副動詞 (*Asian converb*; Bickel 1998; 下地 2007) の典型である。こうした形式によって標示される副詞節は、用法に応じて、統語的に違った構造 (等位接続 vs. 従属接続) を取るのだろうか? それとも、同一の構造を取るのだろうか?

現時点では、筆者は *clause chaining* の用法であっても、従属節として分析する立場を取っている。例えば、付帯状況を表わす場合も、*clause chaining* 用法の場合も、ともに焦点標示される場合があり、その点で、上位の節の要素になっている (埋め込まれた要素となっている) と見ることができるのである (cf. Haspelmaths 1995:15)。付帯状況の継起副動詞の節が焦点標示されている例として (59a) を、*clause chaining* の継起副動詞の節が焦点標示されている例として (31c) を参照されたい。

この問題は、理論的な議論にも直接関与する重要な問題である。Foley and VanValin (1984) は、*clause chaining* の節の統語構造が普通の等位接続 *coordination* とともに従属接続 *subordination* と異なり、*co-subordination* であると規定している。これは *dependent* (e.g. 非定形節) and *non-embedded* (非埋め込み) の節であるという。しかし、こうした「統語」構造を想定する必要があるかどうか再検討する必要があるだろう。伊良部島方言において、*clause chaining* の継起副動詞節は確かにテンス・ムードの標示がなく非定形節であるが、上位の節に埋め込まれていないとする証拠はない。同様の議論についてコリマ・ユ

カギール語の *clause chaining* を記述している遠藤 (2001a,b) を参照されたい。

6. おわりに

本稿では、伊良部島方言の動詞の屈折形態論を記述した。これに関連して、語の定義を示し、屈折形態論の記述範囲を明確にすることを目指した。ここで示した枠組みは、少なくとも周辺の宮古諸方言を記述する上で一定の指標になると思われる。伊良部島方言の動詞形態論における今後の課題は、派生形態論である。特に、語幹合成(複合)は伊良部島方言の重要な形態法的手段であり、これについては稿を改めて総合的に記述を行いたい。また、動詞よりも大きな単位、すなわち動詞複合体(風間 1992)を記述することも重要な研究課題である。特に伊良部島方言の動詞複合体は、音韻的にも一定の結束性を見せ、音声的な切れ目にもなる(Shimoji 2007b)。その点で、語に類似した単位であるともいえそうだ。動詞複合体の持つ音韻・音声的な結束性はオセアニア諸語にも報告されており(Pawley 2003)、語としての動詞と句としての動詞複合体の形式的・機能的な類似点・相違点を明らかにする上で非常に興味深いといえる。これについても、稿を改めて、報告を行いたい。

5節で示した動詞の機能面からの考察は、特に直説法と接続法の対立の問題に言及し、今後のさらなる研究課題が浮き彫りになったであろう。例えば、接続法のムードはさらに精密に記述する必要がある。直説法と接続法の対立において、本稿は談話的な要因が非常に重要な位置を占めることを明らかにした。したがって、これらの機能面の解明には、単に質問調査によったり内省によったりする断片的な研究ではなく、自然談話資料(テキスト)の分析を含めた総合的な記述研究が求められている。

<略号インデックス>

A-C	D-M	N-R	S-Z: other symbols
ABL: 奪格	DAT: 与位格	NEG: 否定	STM: 語幹拡張辞
ACC: 対格	DIM: 指小辞	NOM: 主格	SUB: 接続法
ACC2: 対格 2 (他動性低)	DSC: 談話標識	NPST: 非過去	TAG: 付加疑問
ADV: 副詞化	DUB: 曖昧	OBL. 義務	TOP: 主題
CAUS: 使役	EMP: 強調	PASS: 受動 / 可能	VLZ: 動詞化
COP: コピュラ	FOC: 焦点	PAST: 過去	W: 語
CVB.ABS: 絶対副動詞	FUT: 確定未来	PERF: 完了	
CVB.CND: 条件副動詞	GEN: 属格	PL: 複数	#: 自立語・付属語境界
CVB.CRCM: 付帯副動詞	HS: 伝聞	PROG: 進行相	=: 接語境界
CVB.CSL: 理由副動詞	IMP: 命令	Q: 疑問	-: 接辞境界
CVB.SEQ: 継起副動詞	IND: 直説法	QT: 引用	+: 語幹境界 (複合)
	INT: 意志		

注

* 本稿は、第一回琉球語ワークショップ（琉球大学）において発表した筆者の原稿に基づいている。ワークショップにおいて様々なコメント、アドバイスをくださった方々にこの場を借りて深く感謝の意を申し上げたい。特に、高江洲頼子先生（沖縄大学）からは、動詞のパラダイムの整理について貴重なご意見をいただき、本稿における大幅な改訂につなげることが出来た。また、風間伸次郎助先生（東京外国語大学）からはご専門のツングース諸語の記述の立場から、動詞屈折について多くのアドバイスをいただいた。伊良部島方言の近隣の方言である池間方言を研究されている林由華氏（京都大学大学院博士課程）からは、本稿の語の定義の池間方言への適用について貴重な情報をいただいた。一方、本稿における分析の誤りは全て筆者の責任に属する。

¹ このうち、長浜集落の方言、いわゆる長浜方言を対象にする。

² 本稿では、/taufi/[taofu] ~ [taofu] ~ [taof]「豆腐」や/fisa/[fuisa] ~ [fisa]「草」などに見られる [f(u)] や [f(u)] を /fi/ と解釈する立場に立つ。まず、/f/ のあとの環境では [u] と [u] が音韻的に対立せず、同一母音音素の自由変異（ないし後続環境に応じた異音）と解釈可能である。この母音音素を /u/ と解釈することが、異音の音声的な特徴から最も適切であろうが、本稿では /i/ と考えるものとする。これにより、[f(u)] や [f(u)]（音韻的に /fi/）が /si/, /tsi/, /dzi/ と（形態）音韻論的に同じ振る舞いをすること（2.1.3.2 参照：例えば基底レベルにおいて母音として機能しないこと；存在が無視されること）が合理的に説明できる。ただし、通時的な観点からは、* /ku/ > /fu/ という再構が主流の説であり、本稿はそれに異を唱えるものではない。あくまで共時的な音韻機能の点で /si/, /tsi/, /dzi/ と同じクラスをなし、したがって共時音韻論の中で /fi/ として解釈できることを主張している。

³ 近隣の池間方言を専門にしている林由華氏（p.c.; 京都大学大学院）によると、池間方言のアクセント体系（いわゆる2型アクセント；同氏の御教授による）が伊良部島方言のアクセント体系と異なるために、音韻的自立性の観点から形式によっては伊良部島方言の付属語のうち接語として扱うべきものもあるが、ここで提示した自立語・付属語・接語・接辞の4分類自体は池間方言でも有効であるという。

⁴ Dixon and Aikhenvald (2002) は、形態素が固定した順序で生じることを語の必要条件にしているが、果たしてこれが伊良部島方言を含むジャポニックの言語に当てはまるか、議論が必要である。というのも、他の基準で語と見なせるドメインにおいて、一定の形態素が流動的な位置を占めるからである。この特徴は、特に複合において顕著であり、例えば以下の例で、padzimi-「(し) はじめる」は使役接辞の前にも後にも生じうる。意味は両者で異なるが、この流動性は、語を定義するうえで、形態素が固定した順序で生じるという原則の適用の難しさを物語っているといえる。

mii+padzimi-simi-tar

見る + はじめる -CAUS -PAST.SUB

「見はじめさせた」

mii-simi+padzimi-tar

見る -CAUS + はじめる -PAST.SUB

「見させはじめた」

ただし興味深いことに、接辞については、順序の固定の原則が明確に見られる。例えば、過去の接辞のあとに使役の接辞が生じたりすることはない。このように、語根と接

辞による骨組みは固定しているため、ひとまずこれを語の構造として定義し、複合語幹の分布はこれらを基準にして、その間に比較的自由に入り込むことが出来るというように記述することが可能である。例えば上の例について言えば、語根 **-CAUS -PAST.SUB** の3つの辞順は固定しているが、複合語幹は語根のあとにも、**-CAUS** のあとにも生じうる。複合については紙数の都合上、本稿では扱わないが、今後稿を改めて論じる。

- ⁵ 正確には、接語には2種類ある。すなわち、**internal clitic** と **external clitic** である (Shimoji 2007b)。アクセントの点でホストと一体となるのは **internal clitic** であり、**external clitic** は、ホストの外側にあり、ホストのアクセントに影響を与える。例えば、伝聞の **=tsa** は **external clitic** であり、**ffa** 「子供」(アクセントは語中ないし語末;2.2.1) に接続すると、語中のアクセントのみを引き出す。これと主格の **=nu** (**internal clitic**) を比較されたい。**internal clitic** はホストと一体となるので、**ffa=nu** は韻律的には3モーラの語ということになる。よって、2つのアクセントの可能性を持つ。

f(*)fa(*) 「子供」

f*fa=tsa 「子供だとさ」 cf. **ffa(*)=nu(*)** 「子供が」

- ⁶ 名詞にもさまざまな助詞類が後続する。よって、名詞と動詞の周辺は、以下に示すようなパラレルな構造を持っていると言える。

自立語	(+ 助詞 <i>l...n</i>)	
名詞	(格標識)	(主題・焦点標識)
動詞	(モダリティ標識)	(談話標識)

- ⁷ 筆者の知る限り、この一般化に対する例外と考えられそうなケースが1つある。それは、**-m** と思われる形式が以下のような引用の接続詞 **tii/=ti** に **-m** が接続する場合である。

ai =ti -m dooi.

そのよう **=QT -NPST.IND** だよ

「そうなんだってね」(e.g. 「彼は先生だよ」という指摘に対して)

この **=ti-m** は、テキストにおける出現例から判断すると、すでに知っていることを相手に言われたときに使うようだ。つまり、内容に関して確信があり、相手(聞き手)に対して「その情報はすでに知っている」ということを強く主張する場合に使われる。この点で、5.1節で述べる直説法の用法とある程度共通しており、**=ti-m** の **-m** は、直説法非過去の **-m** と同一の形態素である可能性がある。そうであれば、**-m** は動詞語幹にも、引用の接続詞にも接続可能ということになり、3.1の基準 **a**) に照らして、**-m** は接辞的ではないといえるだろう。この分析が正しければ、**-m** が、その直前に来る **//R//** の実現に関して語中と語末の両方の実現形を許すのも、こうした非接辞的な特徴によるものと言えそうだ。

- ⁸ 否定が屈折に近い性質を持っていることは、日本語に関して風間(1992)も指摘している。風間は、日本語における否定が派生カテゴリーの中でも最も後ろに来て、かつ高い生産性を示すことから屈折的であり、「準屈折形式」と呼ぶことも出来ると述べている。

参考文献 (アルファベット順)

- Akatsuka, Noriko (1985) Conditionals and the epistemic scale. *Language* 61 (3) :625–639.
- Anderson, Stephen R (1985) Inflectional morphology. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description (III)*, 150–201, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bickel, Balthasar (1998) Review article: Converbs in cross-linguistic perspective. *Linguistic Typology* 2 (3) :381–397.
- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols (2007) Inflectional Morphology. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description (III)*, Cambridge: Cambridge University Press. Second edition.
- Bybee, Joan L (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Bybee, Joan L, and Suzanne Fleischman (1995) Modality in grammar and discourse: an introductory essay. In Bybee, Joan L, and Suzanne Fleischman, eds., *Modality in grammar and discourse*, 1–14, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Dixon, R. M. W (1982) *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.
- Dixon, R. M. W., and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) Word: a typological framework. In Dixon, R. M. W., and Alexandra Y. Aikhenvald, eds, *Word: a cross-linguistic typology*, 1–41, Cambridge: Cambridge University Press.
- 遠藤史 (2001a) 「コリマ・ユカギール語における節連鎖の統語構造について (1)」『経済理論』 301 : 1–18.
- 遠藤史 (2001b) 「コリマ・ユカギール語における節連鎖の統語構造について (2)」『経済理論』 302 : 1–17.
- Foley, William A. and Robert Van Valin Jr (1984) *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy (1994) Irrealis and the subjunctive. *Studies in language* 18 (2) :265–337.
- Haspelmath, Martin (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In Haspelmath, Martin, & König, Ekkhard, eds., *Converbs in crosslinguistic perspective*, 1–55, Berlin: Mouton de Gruyter.
- 服部四郎 (1955) 「琉球語」『世界言語概説 下巻』, 318–353, 東京: 研究社.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・宮古 (平良) 方言の文法基礎研究」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (2) 「環太平洋の言語」 日本班成果報告書 (A 4-012)』
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾辞型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人 (編) 『北の言語 類型と歴史』, 241–260, 東京: 三省堂.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み—」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』, 249–340, 国際日本文化研究センター.

- 狩俣繁久 (1999) 「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『日本東洋文化論集』5: 27-51.
- かりまたしげひさ (2002) 「宮古方言研究のこれまで・これから」『国文学』67: 105-115.
- かりまたしげひさ (2003) 「調査データ (沖縄県宮古郡城辺町保良方言)」『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 (研究代表者: 工藤真由美)』: 研究成果報告書.
- かりまたしげひさ (2004) 「危機言語としての琉球語の文法研究の課題」『日本東洋文化論集』10: 57-77.
- Koloskova, Yulia, and Toshio Ohori (2006) Pragmatic factors for the development of a switch-adjective language: a case study of Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. ms.
- Lunn, Patricia V (1995) The evaluative function of the Spanish subjunctive. In Bybee, Joan L, and Suzanne Fleischman, eds., *Modality in grammar and discourse*, 429-450, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Matthews, P. H (1974) *Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 本永守靖 (1982) 「伊良部方言の研究」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (2001) 『琉球方言考』(7: 先島), 78-97, 東京: ゆまに書房.
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』第一書房.
- Nespor, Marina and Irene Vogel (1986) *Prosodic phonology*. Dordrecht/Riverton: Foris publications.
- Palmer, Frank (1995) Negation and the modals of possibility and necessity. In Bybee, Joan L, and Suzanne Fleischman, eds., *Modality in grammar and discourse*, 453-472, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Pawley, Andrew (2003) Grammatical Categories and Grammaticisation in the Oceanic Verb Complex. *Cornell working papers in linguistics* 19 (Spr): 149-172.
- Poser, William J (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66 (1): 78-105.
- 下地理則 (2006) 「南琉球語伊良部島方言」中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描く1』, 86-117, 東京: 東京外国語大学アジアアフリカ研究所.
- 下地理則 (2007) 「琉球語における目的語標示の再考ー伊良部島方言における -ja について」日本語学会 2007 年度春季大会発表予稿集.
- Shimoji, Michinori (2006) Syllable structure of Irapu Ryukyuan. *Shigen* 2: 21-40.
- Shimoji, Michinori (2007a) Parts-of-speech system of Irapu. A paper read at a special seminar on Irapu Ryukyuan, Kyoto University.
- Shimoji, Michinori (2007b) Irapu phonology. *Shigen* 3: 35-83.
- 鈴木重幸 (1960) 「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』41: 74-86.
- Thomas, Pellard (2007) 「宮古諸方言の音韻の問題点」第二回琉球語ワークショップ (於京都大学)
- 上村幸雄 (1963) 「琉球方言概説」国立国語研究所 (編) 『沖縄語辞典』大蔵省. 印刷局.
- 内間直仁 (1970) 「琉球方言動詞活用の記述」平山輝男博士還暦記念会 (編) 『方言研究

の問題点』東京：明治書院。

内間直仁（1984）『琉球方言の文法の研究』笠間書店。

Wetzer, Henry (1996) *The typology of adjectival predication*. Berlin: Mouton de Gruyter.

〈資料〉

以下に、いくつかの主要な動詞の屈折のパターンを示しておく。なお、R 語幹についてはほぼ規則的な語形変化のみを示すため、ここでは非 R 語幹のみを対象にする。まず、以下に解説を先に示し、それに対応する表 1-4 はまとめて提示する。

1) 規則変化のサブタイプ：表 1-2

非 R 語幹は、拡張語幹の作り方と基本語幹の作り方で規則的なバリエーションを見せる。表 1 は、語幹末子音が *stop*, *fricative*, *resonant* の場合における基本語幹と拡張語幹の作り方、およびそれらから形成する屈折形式を示している。4 節で述べたように、基本語幹は音韻的には自立語相当の扱いを受けるので、語根末が *stop* と *fricative* の場合はなんらかの形態音韻的な調整が必要である (cf. 自立語の語末子音は *resonant* のみ；(4e))。まず、語根末が *stop* の場合は、その *stop* は形態音素 //B// (>/b/or/v/), //K// (>/k/or/f/), //G// (>/g/or/v/) のいずれかであり、基本語幹は //B//>/v/, //G//>/v/ というふうに *resonant* の実現形となる。//K//>/f/ および、語幹末が *fricative* の場合は、基本語幹において /i/ 挿入規則が働き、ここでも語末の音素配列に適合するような調整が生じる。なお、//K// からは /f/ だけでなく /ts/ にもなることがある (例えば、//kaK// 「書く」+ 条件副動詞 //tigaa//>/kafi-tigaa/ ないし /katsi-tigaa/ 「書いたら」)。これと同様に、//G//>/dz/ となることがある (//naG//>/nav-tigaa/ ないし /nadzi-tigaa/ 「倒したら」) が、//K//>/ts/ よりも稀である。これらが見られるのはごく少数の話者のみであり、しかも、注意深い内省によって /fi/ や /v/ で言い直す場合が多い。共時的な体系においては、//K// や //G// が /ts/ や /dz/ となって現れる形態音韻操作は動詞語幹から名詞語幹を派生する場合にほぼ限定されており (下地 2006 ; 例えば *munu+katsi* 「物書き」; *buudzi+nadzi* 「キビ倒し」)、//K//>/f/ および //G//>/v/ によって動詞の基本語幹を、//K//>/ts/ および //G//>/dz/ によって名詞語幹を作るという機能の分担が行われている。筆者の確認した限り、基本語幹において //K//>/ts/ および //G//>/dz/ となりやすい語尾は、条件副動詞の -*tigaa* のみである。直説法非過去で *katsi* 「書く」や *nadzi* 「投げる」などで終わっているように見える場合、必ず目的語がゼロ標示され、一方、対格を伴うと必ず *kafi* および *nav* になる。例えば、a) *dzii katsi* 「字書く」に対し b) *dzii=u kafi* 「字を書く」である。こうしたことから、a) を上記の「物書き」と同様に複合名詞と捉えるべきではないか、と考える (*dzii+katsi* 「(lit.) 字書き」)。もしくは、動詞性 (*verb-ness*) にスケールを認め、より動詞性が落ち、名詞性を高めると /ts/ や /dz/ の語幹が生じる、と考えることも出来るだろう。いずれの考え方を取るにせよ、//K//>/ts/ と //G//>/dz/ は、語幹の名詞性を示す形態音韻論操作である。

表 2 では、語幹末子音がモーラ子音の場合の屈折を示した。ここでは、語幹拡張辞を形成する際には重子音化規則 (2.1.3.1) が働く。例えば、*niv-*「寝る」は、拡張語幹

を形成する際に //niv//+/-a// および //niv//+/-i// という基底から、重子音化規則を経て、表層の /niv-va/ および /niv-vi/ となる。なお、モーラ子音の単子音語根の場合もある。この場合、基本語幹は、fricative の単子音語根からは ii の挿入によって /Cii/ となり、resonant の単子音語根からは長音化が適用され /C:/ となる。すなわち、いずれの場合も 2 モーラの語幹となる。これは、基本語幹が音韻的に自立語相当であり、自立語は 2 モーラの長さがなければならないという制限があるからである (Shimoji 2007b)。

2) 不規則変化タイプ：表 3-4

2-a) 一部に R 語幹のパターンが混在するタイプ：「座る」「死ぬ」「いる」「ある」

表 3 は「座る」「死ぬ」「いる」「ある」の屈折を示している。bz-「座る」は、直説法と希求・推量法の一部が R 語幹化することがある。bz- は CV の V のスロットをモーラ子音 z が埋める構造である（音節核が z となっている；2.1.1 や Shimoji 2007 参照）。よって、2.1.3.1 の重子音化規則が働き、bz-za, bz-zi という拡張語幹を形成する。ところが、若い話者の中には、bi-za, bi-zi となるものがおり、さらに bi-dza, bi-dzi となる者もいる。sin-「死ぬ」は、定動詞の一部（特に命令・禁止）で R 語幹化する。aR「ある」と uR「いる」は、拡張語幹と基本語幹の区別を持つが、基本語幹においては、一部の語尾が後続する際、R 語幹のように語末で r が生じ語中で消えるという規則が働く。

2-b) より不規則な変化を見せるもの：「来る」

表 4 に、「来る」の屈折を示した。この動詞は、拡張語幹と基本語幹の区別に相当する区別があり、非 R 語幹が -a 拡張辞を取るような語尾に対しては kuu を、-i 拡張辞を取るような語尾に対しては ts や f を取る場合が多く、非 R 語幹の基本語幹に相当する形式として fii, tsii、ないし t が存在する。なお、tsii は、ごく高齢の話者に限り、非常に限られた形式においてのみ確認された。「来る」と共に不規則変化動詞として挙げられることの多い「する」は伊良部島方言では 1) のタイプであり、語根が as- である。ただし、-a 拡張語幹相当が -u となる (ah-u になる)。参考のため、非 R 語幹の 1) のタイプの「書く」と「する」の屈折パラダイムを同時に掲載したので比較されたい。

表 1. 非 R 語幹の語幹末子音のクラス別による動詞屈折パターン

		tuB- 飛ぶ	kaK- 書く	kuG- 漕ぐ	nas- 産む	tur- 取る
基本語幹 (B)		tuv	kafi (/katsi)	kuv	nasi	tur
拡張語幹 (E)		tub-a/tub-i	kak-a/kak-i	kug-a/kug-i	nas-a/nas-i	tur-a/tur-i
定動詞 (肯定)						
直説法過去	B	tuv-tam	kafi-tam	kuv-tam	nasi-tam	tur-tam
直説法非過去	B	tuv-m	kafi-m	kuv-m	nasi-m	tur-m
接続法過去	B	tuv-tar	kafi-tar	kuv-tar	nasi-tar	tur-tar
接続法非過去	B	tuv-∅	kafi-∅	kuv-∅	nasi-∅	tur-∅
禁止	B	tuv-na	kafi-na	kuv-na	nasi-na	tur-na
義務	B	tuv-kutu	kafi-kutu	kuv-kutu	nasi-kutu	tur-kutu
確定未来	B	tuv-gumata	kafi-gumata	kuv-gumata	nasi-gumata	tur-gumata
意志	E	tub-a-di	kak-a-di	kug-a-di	nas-a-di	tur-a-di
否定意志	E	tub-a-djaan	kak-a-djaan	kug-a-djaan	nas-a-djaan	tur-a-djaan
願望	E	tub-a-baa	kak-a-baa	kug-a-baa	nas-a-baa	tur-a-baa
命令	E	tub-i-∅	kak-i-∅	kug-i-∅	nas-i-∅	tur-i-∅
定動詞 (否定)						
直説法過去	E	tub-a-t-tam	kak-a-t-tam	kug-a-t-tam	nas-a-t-tam	tur-a-t-tam
接続法過去	E	tub-a-t-tar	kak-a-t-tar	kug-a-t-tar	nas-a-t-tar	tur-a-t-tar
接続法非過去	E	tub-a-n-∅	kak-a-n-∅	kug-a-n-∅	nas-a-n-∅	tur-a-n-∅
副動詞 (肯定)						
同時	B	tuv-tstsjaaki	kafi-tstsjaaki	kuv-tstsjaaki	nasi-tstsjaaki	tur-tstsjaaki
即時	B	tuv-tuu	kafi-tuu	kuv-tuu	nasi-tuu	tur-tuu
条件	B	tuv-tigaa	kafi-tigaa	kuv-tigaa	nasi-tigaa	tur-tigaa
絶対	E	tub-i-∅	kak-i-∅	kug-i-∅	nas-i-∅	tur-i-∅
継起	E	tub-i-i	kak-i-i	kug-i-i	nas-i-i	tur-i-i
付帯	E	tub-i-utui	kak-i-utui	kug-i-utui	nas-i-utui	tur-i-utui
理由	E	tub-i-ba	kak-i-ba	kug-i-ba	nas-i-ba	tur-i-ba
条件	E	tub-a-ba	kak-a-ba	kug-a-ba	nas-a-ba	tur-a-ba
副動詞 (否定)						
絶対否定	E	tub-a-da-∅	kak-a-da-∅	kug-a-da-∅	nas-a-da-∅	tur-a-da-∅
否定条件	E	tub-a-da-kaa	kak-a-da-kaa	kug-a-da-kaa	nas-a-da-kaa	tur-a-da-kaa

表 2. 非 R 語幹の語幹末子音（モーラ子音）の動詞屈折パターン

	mm- 膿む	niv- 寝る	az- 言う	f- 咬む	r- 入る
基本語幹 (B)	mm	niv	az	fii	rr
拡張語幹 (E)	mm-ma/mm-mi	niv-va/niv-vi	az-za/az-zi	f-fa/f-fi	r-ra/r-ri
定動詞 (肯定)					
直説法過去	B mm-tam	niv-tam	az-tam	fii-tam	rr-tam
直説法非過去	B mm(-m)	niv-m	az-m	fii-m	rr-m
接続法過去	B mm-tar	niv-tar	az-tar	fii-tar	rr-tar
接続法非過去	B mm-∅	niv-∅	az-∅	fii-∅	rr-∅
禁止	B mm-na	niv-na	az-na	fii-na	rr-na
義務	B mm-kutu	niv-kutu	az-kutu	fii-kutu	rr-kutu
確定未来	B mm-gumata	niv-gumata	az-gumata	fii-gumata	rr-gumata
意志	E mm-ma-di	niv-va-di	az-za-di	f-fa-di	r-ra-di
否定意志	E mm-ma-djaan	niv-va-djaan	az-za-djaan	f-fa-djaan	r-ra-djaan
願望	E mm-ma-baa	niv-va-baa	az-za-baa	f-fa-baa	r-ra-baa
命令	E mm-mi-∅	niv-vi-∅	az-zi-∅	f-fi-∅	r-ri-∅
定動詞 (否定)					
直説法過去	E mm-ma-t-tam	niv-va-t-tam	az-za-t-tam	f-fa-t-tam	r-ra-t-tam
接続法過去	E mm-ma-t-tar	niv-va-t-tar	az-za-t-tar	f-fa-t-tar	r-ra-t-tar
接続法非過去	E mm-ma-n-∅	niv-va-n-∅	az-za-n-∅	f-fa-n-∅	r-ra-n-∅
副動詞 (肯定)					
同時	B mm-tstsjaaki	niv-tstsjaaki	az-tstsjaaki	fii-tstsjaaki	rr-tstsjaaki
即時	B mm-tuu	niv-tuu	az-tuu	fii-tuu	rr-tuu
条件	B mm-tigaa	niv-tigaa	az-tigaa	fii-tigaa	rr-tigaa
絶対	E mm-mi-∅	niv-vi-∅	az-zi-∅	f-fi-∅	r-ri-∅
継起	E mm-mi-i	niv-vi-i	az-zi-i	f-fi-i	r-ri-i
付帯	E mm-mi-utui	niv-vi-utui	az-zi-utui	f-fi-utui	r-ri-utui
理由	E mm-mi-ba	niv-vi-ba	az-zi-ba	f-fi-ba	r-ri-ba
条件	E mm-ma-ba	niv-va-ba	az-za-ba	f-fa-ba	r-ra-ba
副動詞 (否定)					
絶対否定	E mm-ma-da-∅	niv-va-da-∅	az-za-da-∅	f-fa-da-∅	r-ra-da-∅
否定条件	E mm-ma-da-kaa	niv-va-da-kaa	az-za-da-kaa	f-fa-da-kaa	r-ra-da-kaa

表 3. 不規則変化の動詞屈折パターン（一部の屈折で R 語幹化するパターン）

	bz- 座る	sin- 死ぬ	uR- いる	aR- ある
基本語幹 (B)	bzz/bi (d) ziR	sin/siniR	uR	aR
拡張語幹 (E)	bz-za/bz-zi; bi- (d) za/bi- (d) zi	sin-a/sin-i	ur-a/ur-i	ar-a/ar-i
定動詞（肯定）				
直説法過去	B bzz-tam/bi (d) zi-tam	sin-tam	u-tam	a-tam
直説法非過去	B bzz-m/bi (d) zir-m	si-m/sinir-m	u (r) -m	a (r) -m
接続法過去	B bzz-tar/bi (d) zi-tar	sin-tar	u-tar	a-tar
接続法非過去	B bzz-∅/bi (d) zir-∅	sin-∅/sinir-∅	ur-∅	ar-∅
禁止	B bzz-na/bi (d) zir-na	sinir-na	ur-na	ar-na
義務	B bzz-kutu	sin-kutu	ur-kutu	ar-kutu
確定未来	B bzz-gumata	sin-gumata	ur-gumata	ar-gumata
意志	E bz-za-di/bi- (d) za-di	sin-a-di	ur-a-di	ar-a-di
否定意志	E bz-za-djaan/bi- (d) za-djaan	sin-a-djaan	ur-a-djaan	ar-a-djaan
願望	E bz-za-baa/bi- (d) za-baa	sin-a-baa	ur-a-baa	ar-a-baa
命令	E bz-zi-∅/bi- (d) zi/bi (d) zi-ru	sini-ru	ur-i-∅	ar-i-∅
定動詞（否定）				
直説法過去	E bz-za-t-tam/bi (d) za-t-tam	sin-a-t-tam	ur-a-t-tam	ar-a-t-tam
接続法過去	E bz-za-t-tar/bi (d) za-t-tar	sin-a-t-tar	ur-a-t-tar	ar-a-t-tar
接続法非過去	E bz-za-n-∅/bi- (d) za-n-∅	sin-a-n-∅	ur-a-n-∅	ar-a-n-∅
副動詞（肯定）				
同時	B bzz-tstsjaaki	sin-tstsjaaki	ur-tstsjaaki	ar-tstsjaaki
即時	B bzz-tuu	sin-tuu	ur-tuu	ar-tuu
条件	B bzz-tigaa	sin-tigaa	u-tigaa	a-tigaa
絶対	E bzz-i-∅/bi- (d) zi-∅/bi (d) zi-ru	sin-i-∅	ur-i-∅	ar-i-∅
継起	E bz-zi-i/bi- (d) zi-i	sin-i-i	ur-i-i	ar-i-i
付帯	E bz-zi-utui/bi- (d) zi-utui	sin-i-utui	ur-i-utui	ar-i-utui
理由	E bz-zi-ba/bi- (d) zi-ba	sin-i-ba	ur-i-ba	ar-i-ba
条件	E bz-za-ba/bi- (d) za-ba	sin-a-ba	ur-a-ba	ar-a-ba
副動詞（否定）				
絶対否定	E bz-za-da-∅/bi- (d) za-da	sin-a-da-∅	ur-a-da-∅	ar-a-da-∅
否定条件	E bz-za-da-kaa/bi- (d) za-da-kaa	sin-a-da-kaa	ur-a-da-kaa	ar-a-da-kaa

表 4. 「来る」の動詞屈折パターン

	来る	kaK- 書く (参考)	as- する (参考)
基本語幹 (B)	fii/tsii/t	kafi	asi
拡張語幹 (相当) (E)	kuu/ts-tsi/f-fi	kak-a/kak-i	ah-u/as-i
定動詞 (肯定)			
直説法過去	B t-tam	kafi-tam	asi-tam
直説法非過去	B fii-m	kafi-m	asi-m
接続法過去	B t-tar	kafi-tar	asi-tar
接続法非過去	B fii-∅	kafi-∅	asi-∅
禁止	B fii-na	kafi-na	asi-na
義務	B fii-kutu	kafi-kutu	asi-kutu
確定未来	B fii-gumata	kafi-gumata	asi-gumata
意志	E kuu-di	kak-a-di	ah-u-di
否定意志	E kuu-djaan	kak-a-djaan	ah-u-djaan
願望	E kuu-baa	kak-a-baa	ah-u-baa
命令	E kuu-∅	kak-i-∅	as-i-∅
定動詞 (否定)			
直説法過去	E kuu-t-tam	kak-a-t-tam	ah-u-t-tam
接続法過去	E kuu-t-tar	kak-a-t-tar	ah-u-t-tar
接続法非過去	E kuu-n-∅	kak-a-n-∅	ah-u-n-∅
副動詞 (肯定)			
同時	B fii-tstsjaaki(/tsii-tstsjaaki)	kafi-tstsjaaki	asi-tstsjaaki
即時	B fii-tuu	kafi-tuu	asi-tuu
条件	B fii-tigaa(/tsii-tigaa)	kafi-tigaa	asi-tigaa
絶対	E ts-tsi-∅/fii	kak-i-∅	as-i-∅
継起	E ts-tsi-i	kak-i-i	as-i-i
付帯	E ts-tsi-utui	kak-i-utui	as-i-utui
理由	E f-fi-ba	kak-i-ba	as-i-ba
条件	E kuu-ba	kak-a-ba	ah-u-ba
副動詞 (否定)			
絶対否定	E kuu-da-∅	kak-a-da-∅	ah-u-da-∅
否定条件	E kuu-da-kaa	kak-a-da-kaa	ah-u-da-kaa